

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

### 研究経過報告 ——'98年秋以降——

小 嶋 秀 夫

#### [人間発達に関するシンポジウム等]

人間発達に関する次のようなシンポジウムやワークショップに参加し、一部のものは企画段階から関与した。

まず、日本発達心理学会第10回大会のシンポジウムで、発達の歴史的コンテキストと題して話した（吹田市、1999年3月）。

次に、南ドイツのコンスタンツ大学で開かれた学際的研究集會に招かれて下記の発表するとともに、子どもの価値に関する共同研究計画案を検討する会合に出席した。Kojima, H. Naive theories of child development from a cultural and historical perspective. Paper presented at Workshop "Ethnotheories on child development and value of children in cultural context" held at Konstanz University, July, 1999.

名古屋大学教育学部を構成していた2学科が、人間発達科学科1つに再編され、大学院重点化の基盤形成がなされたのは、1997年のことであった。その研究・教育両面の内実を確かなものにしようとして心理学系の教室で企画したのが、「人間発達と心理学」をメイン・テーマとした4回にわたるシンポジウムであった。それは、1998年12月から1999年6月にかけて開催され、心理学の内部での相互作用を展開させるための基盤づくりと、関連する学問・実践領域との相互作用の促進を図ろうとするものであった。この4回のシンポジウムを基に、来春に小嶋・速水・本城（編）の1冊の本、『人間発達と心理学』（仮題）が金子書房から出る。この出版だけで所期の目標が達せられるようなものでないのは当然である。しかし、もしこの企てが学部・研究科の将来の展開と、当該学問領域での発展に何かの寄与をするなら、教室スタッフの協力を得て全体を企画した私として嬉しく思う。なお私は、3部構成からなるこの書物の第1部に、「人間発達と発達研究が位置している状況」という論文を書いている。

#### [歴史的・文化的発達研究]

この領域に関して5件の論文が現れた。最初のもは、フランス語に翻訳されることを念頭において日本語で原稿を書き下ろした。次に、編者および2人の翻訳者（1名は日仏バイリンガルの日本人、もう1人はフランス人）とのやりとりをかなりした。さらに最終段階ではフランス語の読解能力が極めて乏しい私に対して、加藤義信（愛知淑徳大学）氏と、オランダ人文学・社会科学高等研究所（NIAS）で私と同時期に滞在研究員であったピエール・バック（Stanford University）氏による援助が得られたため、私が以前に経験した英語原稿→仏訳よりは安心度がずっと高い。

Kojima, H. Ethnothéorie des soins et de l'éducation des enfants au Japon: Une perspective historique. Dans B. Bril, P. Dasen, C. Sabatier, & B. Krewer (Eds.), *Propos sur l'enfant et l'adolescent: Quels enfants, pour quelles cultures?* Paris: L'Harmattan. 1999. Pp. 185-206. (Traduit du japonais par R. Blin et H. Norimatsu)

次の論文は、英語原稿→独訳によるものである。これはまず、私がNIASのスタッフであるnative writerとの校閲・修正のやりとりを経て完成した英語原稿を作成した。次にそれを基にドイツ語への訳者である心理学者とのやりとりしてできたものである。その点で、その過程が不十分であった以前の私の独訳論文よりも、ドイツ語の能力が大幅に低下した私にとって安心度は高い。ただし残念ながら、私が最終段階で見つけた細かいエラーが、時間的問題のために第1刷には反映されていない。

Kojima, H. Emotionale Entwicklung und zwischenmenschliche Beziehungen im kulturellen Kontext Japans. In W. Friedlmeier & M. Holodynski (Hrsg.), *Emotionale Entwicklung: Funktion, Regulation und soziokultureller Kontext von Emotionen.*

Heidelberg: Spektrum Akademischer Verlag.  
1999 S. 294-312.

次の論文の仏訳部分も、上記の加藤義信氏に負ったものである。

小嶋秀夫 子育ての伝統と教育の課題：日本と西洋 (La tradition dans les soins aux enfants et les enjeux de l'éducation: le Japon et l'occident).

日仏教育学会年報 第5号, 284-296. [仏訳付]

次の論文は、生物学、心理学、歴史学から社会学までを含む3部構成のシンポジウム(早稲田大学)の記録に含まれたものである。

小嶋秀夫 母親と父親についての文化的役割観の歴史  
ヒューマン・サイエンス, 1999, 12(1), 20-25.

最後のは日独社会科学学会での発表内容である。

Kojima, H. Value of children in pre-industrial and industrial Japan. In German-Japanese Society for Social Sciences. Social and psychological change of Japan and Germany. 1999. Pp.195-207.

[その他]

小嶋秀夫 「育児」他9項目 臨床心理学辞典 八千代出版 1999.

[近刊予定]

この紀要の巻頭に、「私の家族関係研究と発達研究の前半20年の回顧物語」を書いた。それは昔話ではあるが、その後と今、そしてこれからの私につながっていると思う。ところで、名古屋大学教育学部に赴任以来、紀要のこのセクションで研究経過報告を続けてきたが、これが最後となった。そこで今回は、名古屋大学在任中に執筆し、西暦2000年のうちに現れる予定の論文等のうち主な5件を挙げておく。

1) 小嶋秀夫・速水敏彦・本城秀次(編著) 人間発達と心理学(仮題) 金子書房。

その中の巻頭論文「人間発達と発達研究が位置している状況」には、次の2)と3)の英文論文(とりわけ2)に基づいた部分が多く含まれている。2)は、英語圏で来年出版予定の『発達心理学ハンドブック』の中で、歴史的視点に立った発達心理学の問題を扱う唯一の章である。それを非西欧の研究者が1人で執筆するのは容易ではなかった。しかし、幸い2人の編者がハンドブック全体の中にうまく位置づく章として、若干の修正条件つきでOKしてくれた。3)は、オランダ人文学・社会科学高等研究所で開かれたシンポジウムを基にしたもので、発達心理学と歴史家からなる6名の滞在研究員グループの寄稿だけでなく、アメリカの心理学と歴史学を中心としたシンポジウムへの招待参加者が寄稿したものが多く含まれている。

2) Kojima, H. Historical contexts for development. In J. Valsiner & K. Connolly(Eds.), Handbook of developmental psychology. Sage.

3) Kojima, H. History of children and youth in Japan. In W. Koops & M. Zuckerman (Eds.), Beyond the century of the child: Crossroads of cultural history and developmental psychology (tentative title).

そして、1985年の内容を大幅に改訂したものが以下のものである。

4) 小嶋秀夫 日本の児童発達観 詫摩武俊(監修) パッケージ・人間と性格2 性格の発達 ブレーン社。

(1999年11月8日)

## 研究状況報告

岡田 猛

1999年2月末より、国際交流基金の援助を受けて、一年間の予定でアメリカのピッツバーグ大学学習開発研究センターにて、客員助教授として研究を行っています。大学改革等で忙しい時期に、じっくりと研究に専念できる機会を与えていただいたことに大変感謝しています。

1998年10月～1999年10月の研究状況報告。

(1) 研究業績

印刷中および発行済み(1998～1999)

編著

岡田猛・田村均・戸田山和久・三輪和久編(1999)「科学を考える：人工知能からカルチュラル・スタディーズまで14の視点」 京都、北大路書房

K. Crowley, C. D. Schunn, & T. Okada (Eds.) (in press). Designing for Science: Implica-